

九州における製造業の変容と労働のあり方を考える

富田 義典 (佐賀大学経済学部・助教授)

変る製造業の生産と技術の構造

機械産業を中心とした製造業の現状を見る場合のキーワードとして四つの点を考えてみました。一つはME化(マイクロエレクトロニクス化)といわれるものです。二つ目には製品の市場構造の問題ですが、いわゆる多品種少量生産化、ポスト・フォーディズムと言う人もいますが、このキーワードです。三つ目には生産分業構造、または下請け工業、中小的な生産下請け工業ということです。四つ目には地域雇用、地域での労働の問題、こういったキーワードを考えました。特にこの中でもME技術革新というのを基礎において、1970年代からのほぼ20年強という一つのまとまりで技術革新の時代をとらえたいと思います。

ME技術というのをまず考えた場合に、製造業の中の加工組み立て型産業というのを考えた場合、部品加工と組立ての二つの分野が考えられます。この二つの分野それぞれにME技術というのは影響を与えているわけです。

まず組立て部門に関しては、よくテレビなどでご存じのようにロボットが導入されています。それが更にシステム化されたライン形成に向かってきています。

部品加工の部門では、まず最初にNC(数値制御)工作機械といわれるマイコンを埋込んだ工作回路ができてきて、これが多様化し、さらに単体で使われるのではなくてシステム化され、これも組立て工場と同じように大型のシステムになってきました。

変る労働力のタイプと労働の質

この技術革新というのは70年代以降の日本の労働を考える場合に、いろいろな労働の局面に決定的と言ってもよいくらいの影響を与え、別のタイ

プの労働力、労働の質を生みだしてきました。

二つの分野のうち組立て分野の労働力の類型はどうなったかということを考えてみますと、おおよそ三つのタイプがあります。

一つ目のタイプがME機器を直接あつかう労働者。これは基本的には比較的男性が、長期勤続者が多く、しかも田舎の場合だったら工業高校出身者がたくさんいます。ここには自分の技術とか労働を実現化するという意識はあまり見られません。

二つ目のタイプは、自動機なり運輸機を導入した場合にすべての作業がその機械によって遂行されるわけではなくて、必ずどこかに手作業が残っています。よく見られる光景ですと、100mの自動化ラインがあると、その中にポツンと一人だけ輪ゴムをつける作業をしている女性がまじっています。またロボットの間で一人だけロボットの作業スピードに合わせて働いている人がいます。経済効率的に考えるとロボットではできない工程が必ずあります。ただしこれは簡単な作業なので多くの場合パート労働者がそこにあっています。

三つ目のタイプは、これは以前からも確かにあった補助労働といわれるもので、包装とか、運搬(工程と工程の間の運搬)とかが今でも残っており、これには社外工が多いのです。

この三つのタイプに分かれていると考えますが、ただパート労働ではこれがさらに多層化され、厳密にはもう少しタイプが多いわけです。

もうひとつの加工分野の労働力の類型に関しても、やはり三つありまして、一つには汎用機を使う労働が一つ。汎用機といってもME機器ではなくて以前からの自動機段階のもので、技術の幅の広い年配の人たちががしめています。二つ目が汎用機とNC工作機械と両方兼務できる労働者で、ここには比較的中堅が多く、この人たちは両方のタイプの機械を動かせるので中核の部分を担当

っています。三つ目のタイプは、NC機のみしか動かせない、技術の幅の狭い若い労働者たちです。この三つのタイプが部品加工工程にもみられるようになってきました。

これ以前の時代というのは労働系の専門用語でいうと、半熟練工とエンジニアの二様のタイプに分かれていたのです。それからやや中間が現れて、もう少し複雑な状況になってきたのがこの技術革新の当初の時代であったと考えています。その後、様々なタイプに分かれ、80年代に地域間の分業を引きおこしたり、工程間の分業を引きおこして、それぞれが分社化され、工場間の分業とか企業間の分業を新たに編成する実質的な裏付けとなったわけです。

中小企業の多品種生産の潜在力

これが80年代に入りまして少々変化を見せながら進行していくわけですが、大企業というのはFA（工場オートメーション化）ラインの大規模投資を当然やるわけです。FAラインの大規模投資は、徐々に様々な品種にも対応できるようなラインにはなっているのですが、どうしても大規模投資に合わない小ロットの注文生産的な品種があり、そういうものは複雑な作業を必要とするのでFAラインにあわず、下請けなり外注というかたちで外に出していくわけです。

その際にどうなったかということ、通常いわれるのは大規模なFAラインの工場と、熟練工とパートタイマーを抱える工場との二極分解的な理解のされかたが多いのです。私が見る限りでは実は中小企業にもいろいろありまして、非常に細かい手の動作を要求される自動機ラインに乗らないようなものを、大企業よりも以前から多品種に適用してきたという中小企業もあったのです。ME化と多品種化という狭間のところで、うまくマッチングしている中小企業も現れてきています。非常に進んだFAラインをもった工場と、手作業の簡単な作業を中心にする工場との間の真ん中の層にあって、多品種にも対応でき、しかも比較的先端設備も入れて新しい技術をうみだしているような中

小企業というのができています。現実には中間がたくさんあって多層化する産業構造の方に移ってきているように思います。

多品種生産の中から労働の未来を

そういった構造の中で九州の特徴というのはどういうものかということを考えてみます。

多層構造といましても確かに下請けの企業というのは労働者を搾取していますし、大企業から中小企業への搾取というものもあります。大企業のいいなりになるという不自由さがありますが、必ず大企業が下請けにだしていかなければならない分野というものは残るわけで、以前から蓄積してきている多品種に対応できるという能力でもって、仕事をもらうという発想はやめ、自ら主導権をにぎって新たな形で生産をするということが比較的九州でもみられるようになってきました。そこに光を見いだすことができます。

もう一つは、かつての素材型産業、重厚長大型の組立て産業は傾いてきています。例えば佐賀県ですと伊万里、近くですと佐世保などでは、男子労働力がかなり排出され、夫がそういう工場から排出された結果、女性が働きに出てきています。この近くの工場の労働を見てみますと、労働者の生活を送ってきた奥さんと農村の主婦とが工場の同じラインで働いており、そこにはコミュニケーションが生まれ、保育所なども生まれ、消費者と農業者と労働者の三者の新たな関係が生まれてきています。すると新たな消費形態、例えば先の多品種型の製品コンセプトを提案し、労働者の側から大企業や生産分業構造をゆさぶるようなことが可能になってくると思います。

その意味では良質なサービスの価値をつきつめ生産に結びつけることが問われてきます。サービス労働ももともとは人間の行為や動作からできたもので、物の生産は人間生活の中のサービス労働の延長から生まれてきたものと言えます。こういう物の作り方をすれば必ず新たな労働の形態が見えてくると考えています。そこに労働組合の再生の芽が出てくるのではないのでしょうか。